

高位聖職者に対する叱責

ヴァチカンの公会議で採決された事柄に従わなかったり、実施しなかったりすることは、教会の規則に従っていないということの意味する。とくに現法王は、すでに5年前に、公会議で決まったことを実施するように勧告している。しかしこの5年間何も改善されていないのだ。

法王は、1月30日のイタリア司教会議の教理問答取り扱い事務所で、次のように述べた。

あなたがたは教会の中で活動する以上は、公会議で採決されたことに従わねばなりません。もし、自分の都合のいいように解釈するのであれば、教会の中にいることにはならないのです。その点で、私たちは自分自身に対して厳しくあらねばなりません。教会の中には絶対的に相容れない者や、第二ヴァチカン公会議の議決を受け入れない者、さらに歴史をさかのぼれば、古い教義だけにに基づき行動しようとする者が存在してきました。第一ヴァチカン公会議のあと、その議決に不満をもった神父や一般信者の中には真のカソリック信者であるという信念を持って、離れていったものもいました。……教会の教えを無にして信仰を続けることはできません。教えに沿わない教理問答を前面に出しても、話にはならないのです。

法王はイタリア人の司教たちに、「今まさに歩みを進める時だ」と述べ、世界宗教会議の件については2005年にフィレンツェで、その推進について語っている。また、国家主義とポピュリズムの台頭を心配した法王は、「公共の話し合いの中で、内側から出てくる強硬な意見に対し、明確な返答を行うこと」を願った。しかし、これに対して、何も動きはなかったし、だれも動こうとしなかったのだ。「5年経った今、イタリアの教会は、フィレンツェで行われた会議の時に戻らねばなりません。国民的宗教会議の理念に基づいて、共同体のための共同体、司教区のための司教区を作らねばならないのです。」

法王は、5年前と同じようなことを、2年前にもローマの神父たちに話しているのだ。しかし、神父たちは、ただ単に「まあ、何とすばらしかったか」、「素晴らしい話だった」、「法王は話が上手だ」と語り合っただけであった。彼らに「5年前の法王のフィレンツェの話はどうだったか」と問えば、「実は話を少しも思い出せない」、「話はどこかに消えてしまった」と答えるだけである。

イタリア人の宗教意識

トリノ大学で宗教社会学を教え、長い間、イタリア社会における宗教的現象を見つめてきた、フランコ・ガレリ元教授(75歳)がまとめた現代のイタリア人の宗教観を紹介したい。調査範囲は、18歳から80歳までの3,200人を対象にしている。

100人中75人が「絶対者」の存在を認めている。25年前は82名だった。宗教が人間の生命に関する奥深い意義を教えてくださいと思う者は、65人となった。25年前は82名だった。日曜日の教会のミサに出かける人は、以前は80名であった。そのうち毎日曜日に絶対に出かけるというのが30名だった。今は20人にまで減ってしまった。信仰を求める人は、単純な人とか、未熟な人と思う者が今は23人である。25年前、そう思う者はわずかに5人だけだった。イタリア人の100人中の

76人が自分をカソリック信者と考えているが、以前は88人だった。かつて使徒たちが生きたように自分も生きようとしている者は30人である。以前には41人もいたのだ。

宗教学者フランコ・ガレリの目に映ったのは、「宗教心のあまりない人たち」である。新聞記者との1問1答を記そう。

(問) イタリアの状況はどうですか？

(答) この25年間にカソリックを信じないものが30%増加しています。ところが他の信仰では、2%から8%程度に過ぎません。カソリックは疲れていると言えるでしょう。1998年の時点ですでに、ミラノのカロロ・マリア・マルティーニ枢機卿はカソリックを4つのグループに分けました。それは「樹液」「幹」「樹皮」「麝香」です。第一の「樹液」は22%、第二はいつも活動していないがカソリック信者でこれは30%、第三が伝統や文化のために「樹皮」に食いついていたのが44%、第四が何らかのカソリックの信条を信じているのが4%です。

(問) ともあれ無神論者が増加したんですね。

(答) まあ、他の国ほどではないですが、イタリアでは何かことがあれば、教会に走る人がまだ多い。珍しいことには、運命の世界に生きるのではなく、自分の選択の世界に生きていていると思っています。

(問) この25年間に何がそうさせたのでしょうか？

(答) 宗教的実践が非常に少なくなったことです。儀式的受容は個人の自由に任されています。信じる者は、信じることは疲れることであると知っています。何も信じないものは、信じないことは浮かれることであることを知っています。そのような相関性があるようです。

(問) 無神論者、不可知論者が増加しているということでしょうか。

(答) それは、18歳から34歳の間に一番多い。次が35歳から40歳です。彼らは、神は存在しないと宣言しています。信仰のないところに祈りはなく、精神生活もないと言います。

(問) 教会で「結婚式」をあげるのが2018年より減少していると言いますが。

(答) そもそも「式」それ自体が、対社会的なものから、個人的なものになって来ているのでしょう。

(問) 46%が給与の1000分の8を寄付することを反対していると言いますが。

(答) それは社会福祉が向上していることにも関係があるでしょう。

(問) 20%が避妊の非合法性を訴えています。

(答) 逆に言えば80%が避妊を受け入れている。これはいろいろな条件を考えれば領けることだ。

(問) 63%が「安楽死」を認めています。

(答) 賛成者はこの25年間で、2倍になりました。賛成者100人のうち、76人までがカソリック教徒です。しかし、より精神的(霊的)な者は反対が多い。「代理母」つまり、他の女性の「子宮」を借りての妊娠の賛成者はわずか20%です。

(問) ヨーロッパでは戦争のない年が、75年続いています。もっと続くのでしょうか？

(答) 今我々はCOVID-19と戦っています。2月末の調査では、新型コロナウイルスの感染拡大の収束を願って、20%の人々がいつそう祈るようになりました。